

な方向に進むべきかについて、若干の提言を行いたい。

右に紹介したような近年のアイヌ文化政策の策定に、文化人類学者は自分たちの研究成果を提供するというかたちで大きく関わった。言い換えれば、自分たちの利害関心をもってアイヌ民族の文化を定義すること、さらにいえば現実のアイヌ文化の存続と自らの研究の存続とを結びつけることに政治的に成功した。このことを端的に表しているのが、すでに引用した「アイヌ文化振興・研究推進機構」の設立趣意書である。学界のなかにはこうしたかたちでの関わりかたにさまざまな異論があるようだが、肯定的であるにせよ批判的であるにせよ、ことアイヌに関する限りは、若手の養成を含めた研究動向全体が、自らの存在意義をそうした政治的流れとの関わりに求めつつあるように見える。

しかし、右の設立趣意書に盛り込まれた文化人類学の成果のなかには、再検証可能な一次資料の裏づけに乏しいものも存在する（この点については近刊の拙稿「アイヌ史研究とアイヌ語」とくに「イオル」をめぐって――」で検討を行った）。また新しい研究を標榜しているにも関わらず、資料の収集とその利用の方法とが従来の学の枠組みを超えていない研究も見受けられる。

アイヌ口頭文芸の研究は、このような文化人類学の動向と同じ方向に進む必要はない。これまで蓄積されてきたまとまった量の一次資料があるからである。それらを校訂してできるだけ共有し、一次資料を批判的に扱うことを研究者養成の軸とすることで、研究を将来に向けて継続するというわれわれの利害関心を実現することができる。そしてこのことは、学界の内部にとどまらないより多くの人

たちの利害関心とそう大きく衝突することはないと見通しを私は持っている。

もちろんいっぽうで、われわれはそれぞれのフィルターをとおして自分が接する人々の「思い」を受けとめ、また自己の利害関心を再確認する作業を行わなければならない。そして研究者内部でも意見を交換しながら公共の利害関心の確認や形成を行うことも必要な作業である。しかしこれらの作業にとっては、言語や口頭文芸そのものおよびそれらの研究の存続は前提ではない。

（おくだ・おさみ／札幌学院大学）

●遠野

「語り部教室」を始めて一年半

佐 藤 誠 輔

1 語り部の星、鈴木サツさん

とおの昔話村の支配人谷口さんと二、三年来暖めて来た「語り部教室」の計画が実現したのは、昨年（一九九六年）の五月十日だった。博物館の賛同も得て華々しく発足しようという、第一回の語り部はもちろん鈴木サツさんははずであった。

早速語りをお願いしようと、静まり返った玄関から声をかけると左手奥の部屋から、元気なサツさんの声だけが応じてくれた。私も負けずに大きな声で来意を告げると

「分かりました。今おれ（は）とっても出はつていがれるしかけでねえがら、顔ば出されねども、紙つこさ書いたものを後でおぐれんせ。それ見て行ぐがら」

サツさんは、「今は寝ていて、そこへ出られるような姿ではない

が、計画表（文書）をもらえば、それに従つて語りに出掛けます」

と言うのである。しかし、軽く考えていたサツさんの容体は意外に重く、その年の十月二十六日に永眠した。結局「語り部教室」でのサツさんの語りはどうとう聞くことが出来なかつた。

私の知り合いに「サツさんの弟子になりたい」と言しながら、その後行政の要職についたためあきらめた人があつた。また、サツさんの語りを追いかけ、「私はサツさんの弟子だ」と自称する方もいるのだという。

このように、語り部の大きな星であつた鈴木サツさん。「日報文化賞」に輝き、「地域文化功劳賞（文部省）」まで得たサツさんが、こんな言葉を漏らしたことがある。

「今でこそ、昔話語りもなんぼが認められるようになつたどもナス。二〇年前は見向きもされねがつたんだがら。『なあに、昔話など』と言われたもんがんすヨ」

「そうだ、ある八百屋の店先で『おめだち遠野のはらかたり（嘘つこ）語つて歩いて、錢儲けて』って言われた時は悔しかつたナス。それでも、その主人に『サツさんサツさん、世の中にはおめさんのやつてることが分かる人もいるんだがら、負けねで続けてがんせ』と言われた時は涙出るぐれえうれしかつたナス」

「など」と卑しめられた遠野の昔話を引つ提げて、サツさんは北

海道から九州まで、文字通り日本全国を語り歩いた。そして、それで勇気を得た妹たちや他の語り部たちも続いた。おかげで、今は、日本各地の人々が、昔話を聞きに向こうから遠野へ集まつて来る。

2 方言と共通語

方言には、同じ遠野人でも理解の難しいものがある。先のサツさんが「まあず、そのひたら（人達）私の話聞いても『うだかきつぶれだ』ども言わねのス」

と言つて私を悩ませたことがある。降参して教えを乞うと、それは「熟んだ柿が熟したことを教えない」転じて「言うべきときには物を言わない」とことと知つた。

遠野に伝わる昔話や昔の話を、方言で語るべきか共通語で語るべきかは、この事業に関わるもの頭の痛い問題である。
数年前、何げなく語り部ホールを訪れたとき、帰り際の学生の声がふと耳に留まつた。若い彼らは「ちつともわかんないや」と吐き捨てるように階段を降りて行った。

かと思うと遠野物語研究所を訪れた年配の方は
「このごろの語り部は共通語が多くなつて、遠野らしくなくなつた。あんな語りなら東京でも聞けるよ」

方言がすべてよくないもののように言われた時代から、特徴のある言葉として大事にされる夢のような時代に入つてみると、その方言が通用しなくなつて、皮肉な現象が地方には起きている。
遠野でも、大家族が激減して共通語教育を受けた若夫婦に子供とい

う核家族が増えてきた。また、大家族であつても、メディアの広がりやヒターンした青年たちによつて共通語の使用は加速され、いつの間にか、土地の言葉（方言）だけで、社会に通用する時代ではなくなつた。

現在の遠野言葉は、①（昔からの）遠野方言②遠野なまりの共通語（サツさんによれば→通用語）③共通語の三つに大別される。

遠野の語り部たちは、②遠野なまりの共通語を土台としながら、①遠野方言の一部を味付けして語つているのであつて、昔々の遠野方言だけで語つているものは一人もいない。

これは、サツさんの場合（語り手の心の記録『鈴木サツさんの全

昔話集によせて』小沢俊夫『鈴木サツ全昔話集』一九九三年）に見るのが最も手つ取り早いが、比較的分かりよい遠野方言を選び出し、風味に工夫をこらして語つているのが現状である。

言葉は使わなければ意味がない。発音記号を付していくに数多く収集しようとも、使われない言葉は次第次第に滅びて行く。だとすれば、味付けされたとは言つても語り部の使う方言は實に貴重なものであり、提供される語り部ホールのような場所はこれまた大きな存在なのである。

いずれ、サツさんが父の力松さんから受け継いだ話を語る場面は、語り部ホールのような場にしか残つていないので事実である。

3 聞き漫る耳、聞き分ける耳

語り部ホールで語る三〇分間では、およそ四話ほどが語られるが、そのうち二話は『遠野物語』から選ばれことが多い。従つて『遠野物

語』を読んで来た人であれば、それほどきつくない遠野なまりの語りの中から、およその粗筋や感じはつかめるのではないかと思われる。だとすれば、「ちっともわかんないや」と言つた学生たちは、ひょっとして、子供時代からこんな話になじんでこなかつた人達ではないのか、と言う疑問が生じてくる。

と言つるのは、今の遠野人よりもと訛りがひどかつたと思われる佐々木喜善の言葉を正確に聞き取つて文章化した人がいる。いうまでもなく柳田国男であるが、（彼の耳のよさに、私は畏敬さえ感ずる一人だが）言葉や物事に対する興味や関心の違いが、方言理解の深浅につながることがあるようと思われる。

谷口支配人による、大阪の人でも用意のある人は語りに聞き浸り、地元盛岡の学生でも用意の無い者は「よく分からなかつた」などと答えるそうで興味深い話である。

また「このごろの語り部は共通語が多くなつて、遠野らしくなくなつた。」と言つた人の場合は、「同じ語り部の話を聞いた上で比較なのかな」という疑問がちらりと頭をかすめた。すなわち、以前に聞いた語り部が、北川みゆきさんやサツさんやミヨシさんなど明治生まれのベテランであれば、比較するのはちょっと無理かなと思つたのである。

これは方言の問題であるとともに、聞き手の側の郷愁を無視すれば、語り部一人一人の特徴や力量の問題でもある。

4 語り部の特徴→『遠野物語』の底辺をなす語り

語り部にはそれぞれ個性や特徴が有り、親子姉妹でも微妙に異な

第一表 「サムトの婆」は「う語られる

る。まして、村を越えると、時間空間とも別のもののように語りられることがある。二年間、語り部ホールに出演する語り部や多くの遠野人たちと付き合ってみて、その違いが分かるとともに、遠野の人々の語りが、実は柳田国男の『遠野物語』の底辺になっていたのだと実感した。

〔第
一表 参照〕
〔遠野物語〕第八話「サムトの婆」によつて考察してみたい

①題名 三人のうち鈴木だけが「寒戸の婆」で、他の二人は実在する。他の二人は実在する。
の集落にこだわり「登戸の婆」と言っている。阿部は物語の場面である松崎村の生まれで、自分の家だけでなく隣の婆様たちからも「よそ村では異なった語り方をしているようだが、これは登戸の話だ」と伝え聞いている。また、もう一人の白幡も松崎が現住所である。

②あらすじ 鈴木はほぼ『遠野物語』に沿って語られる。阿部は下登戸の家と特定している。が、あらすじは殆ど同じである。白幡では『遠野物語拾遺』二五話「川の主に娘の身代わりとして下女を捧げた話」の後に娘が隠される。

③何年後にどんな時に現れるか 鈴木は「三十年もたってから、功徳をしていたとき」白幡も「三十三年たった合祀の日」と娘の十三回忌と音似するが、可部は「何十年につづけばな」と手放し易湯屋

④ どんな日にもどんな姿で 三人とも言い合わせたように 「寒い日
に」「ぼろぼろの着物を着た」「婆様」として現れる。

⑤ 結末 一度と現れない。

⑥教訓 白幡には無いが、鈴木と阿部には「いつまでも遊んでい

ると『寒戸の婆』来るんだじえ』という教訓が年齢相応につく。また、白幡も聞き手の年齢によつては教訓をつけるかもしれない。

おもしろいことに、三人とも「婆様が二度と現れない」結末になつてゐるが、話題提供者の佐々木喜善は（「不思議な縁女の話」『東奥異聞』）で、「それからは毎年やつてきた」と語つてゐる。

この再来型の「サムトの婆」は今のところ聞いていない。が、かつてこの手の話は、子女への教訓として語られたから、婆様が再来しては締めくくりがつかなかつたのかも知れない。

5 語り部の力量

高座に座つただけで絵になるという語り部がいる。その筆頭が鈴木サツさんであり白幡ミヨンさんである。

ある幼稚園の記念行事に参加したとき、会食の席にサツさんも招待された。お酒が入り、宴もたけなわになつたころ、突然、サツさんの昔話が所望された。

「えへ、こんながやがやした所で昔話を聞く人がいるの」私は危惧したが、サツさんは悠々と高座に上がり、「鈴木サツでござんす。今晚は何を語りんすべ」

と、ほほ笑むと、求めに応じて一つ二つと語り始めた。なんとどんな偉い人が話してもさつきまでは消えなかつた酒席のダミ声が嘘のように消え去り、百人ほどの目と耳が舞台に集中してしまつたのである。

「ああ、これがサツさんに自然に備わつた話芸なのだ」

と、私は全く感じ入つてしまつた。

「遠野の語り部はプロなんだから、裏話（艶っぽい話）だけでお客様のご機嫌をとつてはよくながんすよ。素人とは違うんだからナス」

まさにその通り、サツさんは本格昔話に笑話を交えて堂々と酒席を乗り切つたのである。

6 「語り部教室」の実施

さて、私たちが始めた「語り部教室」のねらいは「語り部のプロ」を育成することではなくて、「昔話の奥深さや、それを語る語り部の再評価」にある。

事実、参加者がこの「教室」を選んだ理由は、

「遠野人なのに、昔話の一つも出来ねば恥ずかしいからナッス」

「覚えてって、孫や都会の人達に語つて聞かせるのス」

「わたしは、心の安らぎを覚えるつても楽しい時間でござんす」

「講師の話を聞くのがよくて遠くから通つてんした」

など様々であった。親からボツンボツンと聞いた話を一つのものとして繋げ、自分の昔話を持ちたいという人と共に、昔話の背景を知りたいと言う人意外に多かった。

「教室」は、前期（五月から七月まで）後期（一〇月から一二月まで）各々六回、合計一二回。一回は二時間で隔週金曜日の午後一時三〇分、三時三〇分とした。

スケジュールは、「①講義②語り部の話を聞く（観光客と一緒に）③語り部との対話④受講生の実演」で、何れも三〇分単位とした。

①の講義は、昔話をただ単に「おもしろおかしいもの」にしないためのもので、遠野で語られて来た昔話や昔の話は、「遠野物語」の底辺となって関連していることを知つてもらうためである。

②は、観光客と一緒にになって、その熱い雰囲気を体得してもらうためのコースである。

③は、語り部に質問したり、もう一度語ってもらう時間で、彼らの人生観をより深く理解できる。

④互いに実演し合うことによつて、人前で話すことが、いかに大変なことか実感してもらうための時間である。

(この他行事への参加を通して実践的に感じ取る「行事コース」を用意した。)

会費は一回毎二〇〇円とした。「自分のお金で勉強する」という、生涯学習の原則を貫きたかったからである。

それでも、定員二〇名の募集に対し、延べ五〇名の応募があり主催者をほっとさせた。

その殆どが熟年の女性であったが、年代には大きな幅があつた。最高齢者は八〇代の男性であり、逆に最も若いのは地元高校の生徒六名であった。

受講生のあまりの熱心さに、出席の良好な方々で、「昔話語り」の実技をもこなした方には、「修了証」を出すことにした。なんと出席率七〇パーセントのハードルを越え、「修了証」を獲得した方が二人もあり、皆勤賞を得た方が二人も居たのにはびっくりした。

二月一日～二日の「遠野むかし話祭り」には、八名の方が自ら Townsend 加入し、大変な喝采を受けた。

昔話や昔の話の伝承の方向は、親から子供そして孫へと継につながつて行くことが望ましい。しかし、昔話はもちろん、その中核となる方言そのものが消えかかっているとき、そんな悠長なことは言つていられない。

そこで、この事業を始めた遠野むかし話村、遠野市立博物館、そして遠野物語研究所の三者は協力して、「昔話の伝承を、まず、横に広げよう」として実行したのである。

一年目はどうやら成功し、これから二年目の後期に入る。相変わらず評判は上々であるが、これは三者の協力はもちろんのこと、現役の語り部たちの協力が実に大きい。自分の担当でないときにも進んで出席して学習する彼らの姿にはとてもうたれる。

遠野にはまだまだ「なあに昔話など」とか「遠野物語」だつたらおれから聞げ」という元気のよい人達がいる。

これは裏を返せば、「遠野物語」の底辺をなす昔話や昔の話（世間話、伝説）を、彼らが秘蔵している証拠でもある。遠野老人クラブによつて毎年発行される『遠野今昔』などは、書くことを通した貴重な語りの場であるが、そういった常民の話や行動を何とか後世に伝承して行きたいと思つている。

※鈴木サツさんは故人であるが、繁雑を避け「故」は省略した。
(さとう・せいゆう／遠野物語研究所)